深い学びのために

研究の解答例

1　全体を三つに分け、場面ごとに内容をまとめてみよう。

【答】・第一段落（初め～P六一・11〈ほとびにけり。〉）
ある男が、安住の地を求めて東国に旅立ち、やっと三河の国の八橋にまでたどり着いた。そこで「かきつばた」の折句に旅情を託して詠み、一行も同じ思いに泣いた。
・第二段落（P六一・12〈行き行きて〉～P六二・7〈塩尻のやうになむありける。〉）
さらに東へ進み、駿河の国の宇津の山を越えてゆくとき、修行者に出会い、それに都への文を言づけた。また、初めて見る富士山に驚き、歌に詠んだ。
・第三段落（P六二・8〈なほ行き行きて〉～終わり）
さらに進んで隅田川に着いた。舟に乗るときに都鳥を見て、いよいよ都を恋しく思うあまり歌を詠んだ。一行も同じ思いに泣いた。
▼ポイント▲　厳密には四つの部分に分けられ、そのそれぞれに和歌が一首ずつ配置されている。ここでは「駿河なる」と「時知らぬ」の歌を含む部分は場面のうえから一つと考える。

言葉と表現の解答例

1　次の傍線部の助詞「ば」の意味と用法を、それぞれ確認し、現代語訳してみよう。
(1)　**京には見えぬ鳥なれば**（六二・13）
(2)　**名にし負はばいざ言問はむ都鳥**（六二・15）

【答】(1)　接続助詞（順接の確定条件）　(2)　接続助詞（順接の仮定条件）
▼ポイント▲　(1)断定の助動詞「なり」の已然形に接続するので、接続助詞「ば」の順接の確定条件。「…ので」と訳せるので原因・理由。(2)「負ふ」というハ行四段動詞の未然形に接続する、接続助詞「ば」の順接の仮定条件。

言語活動の解答例

1　「から衣」「駿河なる」「名にし負はば」の三首の歌に共通する心情は、どのようなものか、考えてみよう。

【答】（意図）三首の和歌に共通する男の心情を、順を追って各歌を現代語訳させ、心情を読み取ることから捉えさせたい。
（手順）
1　それぞれの歌の現代語訳を確認し、心情を考える。

「から衣」
（現代語訳）
衣服が着ているうちに萎れるように、馴れ親しんだ妻が（都に残って）いるので、はるかに遠くまでやってきた旅をしみじみと思うことだ。
（心情）
都へ残してきた妻のことを思い、都から遠く離れた寂しさをしみじみと感じている。
「駿河なる」
（現代語訳）
私は駿河の国にある宇津の山に着いたが、「うつ」と名のつく現にも夢にもあなたに逢わないことだなあ（もうあなたは私のことは思ってくれないのだろうか）。
（心情）
さらに都を離れ、山越えのもの寂しさとともに、妻への恋しさを募らせている。
「名にし負はば」
（現代語訳）
都鳥という名にふさわしいのならば、さあ尋ねてみよう、都鳥よ。私が恋しいと思う人は無事でいるかどうかと。
（心情）
流浪の旅の果てにわびしさも極限になり、妻への思慕をさらに募らせ、遠く離れた都を慕い、都鳥に問いかけている。

2　三首の歌に共通する心情を考える。

（ゴール）共通して詠まれているのは、妻と都に対する思慕の念である。「から衣」の歌ではまだ余裕があり、旅の座興歌に興じつつ、心の底では都に残してきた妻への断ち切れぬ思慕の念を、旅愁と共にかみしめている。「駿河なる」の歌では、さらに都を遠く離れて旅の心労が重なるにつれ、疑心暗鬼もからんで、いっそう妻への恋情を募らせる。「名にし負はば」の歌に至って、流浪の旅の果てにわびしさの極限にまで達して、都の妻への思慕を強め、その安否を都鳥にまで問いかけざるを得なくなっている。各歌に詠まれた心情を順に追ってそれらの思いが次第に強まっていくことが理解できればよい。

▼ポイント▲　この三つの歌は妻への思慕と旅愁の心情が主題であるが、行程が進むにつれてその心情が深くなっていくという構成をとっていることに注意させる。男が歌を詠むのは川や山にさしかかった時であり、これらは京との断絶を感じさせる象徴的なものである。京からの距離を実感するその度ごとに、男は京とそこにいる恋しい人への思いを募らせ、その思いの高まりが歌になっていることを理解させたい。なお、「時知らぬ」だけが旅情を主題とするが、都では見たことのない景色を詠むことで、遠くまで来たことを強調している。

（植田　敦子）